醫學博士 永井潛先生述

青年男女と性的生活

婦女新聞社發行

特117
164

始

青年男女と性的生活

醫學博士　永井潛先生述

婦女新聞社發行

特117
164

生を誤るものが極めて多い。こゝに於て、最近性の教育の

本書を進呈するに付

婦女新聞創刊滿二十年の記念として、此の小冊子を進呈いたします外形は小さいものでありますけれども、その内容は、人生の最も根本的にして且神秘なる『性』の取扱方に付、永井博士が、眞面目に、熱誠を以て說かれたもので、青年男女諸君はいふまでもなく、その父たり母たらるゝ方々も、是非一讀せらるゝ必要があらうと信じます。

次に、兼て婦女新聞紙上に於て、廣告し、或る方には特に手紙を以て申上げました通り、來る五月第二日曜發行以後の婦女新聞は、從來の新聞型を廢して菊版雜誌の體裁に改め、保存に便利なやうに致します。それと同時に、內容にも一大刷新を施して、面目を一新し、一大發展を遂げる筈であります。就ては、此の際特に皆樣に御承知置を願ひたいのは、婦女新聞社と愛讀者との關係であります。

婦女新聞は、純然たる個人の營利を目的として居るものでなく、日本婦人の進步と全社會の向上とを圖る爲めに發行して居るのでありますが、無論自給自足の必要から、一面營業的に活動は致して居りますが、それは已むを得ない手段で、本領ではありません。就ては愛讀諸君に於ても之を諒とせられ、單に代價を拂つて購讀して居るのだとお考へにならず、社の株主であり、後援者であるといふお心持を以て、直接間接に社の發展を助けていたゞきたいのであります。幸に皆樣の御援助によつて社が發展して行けば、充實した新聞を安く賣つて、社會的にも益々有力な活動が出來ますけれども、御援助が得られなければ、勢ひ新聞の定價も高くしなければならないやうになります。五月の創刊滿二十年以後の婦女新聞は、前記の通り雜誌型に致しますので、表紙印刷製本等の原價が今日よりも約二割高くなりますけれども、當分はそれに堪へて新讀者の增加を俟つ覺悟であります。

何卒この機會に於て、御一人一名づゝの新讀者を御勸誘下さるか、或はあの人ならとお考へへの人名を二人でも三人でも御通知下さるか（其の人へは本社直接に勸誘を試みます）いづれかに御願ひ致したいのであります。御承諾のほど切にお願ひ申します。

謹んで御許樣並に御家族の御幸福を祈ります。

大正九年四月　婦女新聞社長　福島四郎

はしがき

男女の性は、人類生々發展の根源たるに關はらず、從來家庭に於ても之を秘密にし、學校教師も之に觸れることを恐れて居た爲め、青年子女は之が知識をどこにも得ることが出來なかつた。然も人生の春が來て、自然に性の芽ぐむのはどうする事も出來ないから、或る者は此の情火に燒かれて身を滅ぼし、或る者は人生の不可解を叫んで世を厭ひ或は精神的に墮落し、或は肉體的に健康を損じ、之が爲めに一生を誤るものが極めて多い。こゝに於て、最近性の教育の

婦女新聞社寄贈本
大正9.5.17 寄贈

必要が唱へられ始めたが、元來が人生の神秘に屬する問題であるため、議論のみは盛にせられるけれども、實際に青年男女を指導するに足るやうな眞面目な言説は滅多に聞かない。

婦女新聞社では、時々結婚問題講演會を開いて、結婚に關する正しい知識の普及に努めて居るが、其の第二回講演會の折、生理學者にして、又哲學者たる醫學博士永井潛先生に此の問題についての御講演を願つた。本書は其の時の筆記である。一たび婦女新聞に連載したが、更に廣く一般の青年男女及び親たり敎師たる人々の參考に供したいと思

ひ、こゝに婦女新聞創刊滿二十年の記念として一小冊子に印刷する事としたのである。

印刷に附するに當り、永井先生は、極めて親切に、綿密に、筆記の誤を正し、漏れたる點を補つて下されたので、前に婦女新聞に連載したのとは全く別物の如き觀を呈するに至つたこと、感謝に堪へない。

時正に陽春四月、櫻花は美しく咲き盛り、柳はやさしい眉をひらいて、天地の生氣は路傍の小草の上にも充ち溢れて居る。この生氣、この力の、人の上に發現する青年男女の性を、いかに制御し、いかに取扱ふべきかにつき、何等かの暗示

を讀者諸君が得られたならば、本社が多忙の永井先生を煩はした志は乃ち足りるのである。

大正九年四月廿五日東京市淨水所の濾過池の水面が鏡の如く穏かなるを眺めつゝ婦女新聞社樓上の編輯局にて

福島四郎記す

青年男女と性的生活

東京帝大醫學部教授
醫學博士　永井潛

神秘の問題

斯く多數の生氣潑溂たる青年諸君の前に、生命の最も神秘なる、而して最も大切なる問題を、嚴肅に眞面目に御話することを以て、深く光榮に存ずる次第であります。

諸君、生活體の爲すべき仕事は色々ありますが、之を二つの主要なるものに總括することが出來ると思ふ。其一つは自己の保續と云ふ

ことであり、他の一つは種族の保續と云ふことであります。

飢餓と戀愛

自己保續に就ては何が一番大切であるか、何に依つて生活體は自己の存在を確實になし得るかと云ふと、即ち飢餓である。彼を養はしめ、彼の生命を維持せしむる爲には必ず飢餓によつて食物を取らなければならぬ。種族の保續は何に依つて出來るのであるかと云ふと、即ち戀愛であります。自己を保續する所の飢餓は即ち利己主義（エゴイズムス）である。之に反して、種族を保續する所の戀愛は利他主義（アルトルイスムス）である。即ち他を愛する所の行爲である。此二つのエゴイズムスとアルトルイスムスとが、互に縱となり横となつて、生活體の社

會的生活てふ興味ある而して又複雜なる一卷の織物を織出すのであります。而して生活體の大いなる此二つの仕事の最も複雜なる交渉は、之を人間生活に於て求めなければならぬと思ひます。蓋し、一面に於て自分を保續すべき饑餓、他面に於て種族を保續すべき戀愛なるものは、生物の種類に於て違つた關係がある、違つた意味に於て、違つた價値を以て働いて居るのであります。生活體が比較的單純であつて、比較的下級に位して居るものに於ては、自己を保續する所の慾望、即ち饑餓なるものが頗る重きを爲して居る。それに反して生活體の機能が段々と複雜になり高尚になるに連れ、殊に精神生活が非常なる開展を遂ぐるに從つて、曾に自分を保續する利己主義即ち饑餓のみを以て

滿足することが出來なくなつて、寧ろ利他主義、即ち戀愛に於て其生活の擴充を期することになるのであります。私は今簡單なる事實を提げて、其論斷に二三の證據を與へて見たいと思ふのである。

動物の交尾期

凡そ生活體はリズムを以て其生命を發展して行くものである。此リズムが、殊に生殖的方面に於て種族保續の最も明瞭に現れ來るのは、動物に見る所の性慾の亢進する時期、即ち交尾期であります。此交尾期の起り來る關係を見ると、外界の有樣に非常に影響されるのである。即ち自己の保續を、比較的容易く安心して行ふことの出來る時期に於て、初めて自分の種族を保續するに必要なる交尾作用が現れ來る

ことを見るのである。ジョンストンと云ふ動物學者が、曾て亞米利加の鹿の生活に就て委しい報告を出して居りますが、亞米利加の鹿は、長い冬を經過して春になると、其毛皮が變るのである。さうして木の芽が出ると同時に、自分の角が矢張り新しく萠え、木の葉が茂つて食物を得るに都合好くなつて參ります時、其雌が子供を產むのであります。さうして此子供は、春暖い時から夏の初めに掛けて、乳を以て養はれ、だん〳〵と暑い夏が初まりますと、其暑さと且又水を得ることの困難なる爲に、鹿の生活狀態は、春に比べて衰へて來るのである。斯の如くして、冬は勿論のこと、冬を越え夏になるまでは、鹿は其食物を求めて自分を完全に保續して行くと同時に、其產れた子供を育て

る爲にも苦心しなければならぬのである。此の間は、第二の生殖を行つて更に種族の保續をする如き遑はないのであります。然るに秋の風が吹き初めまして、さうして美はしく咲いた花が累々たる果物となつて梢に實のり、豊なる天然の供給が出來て參りますと、こゝに初めて交尾と云ふ働きが現れて來るのである。此交尾期に於て、鹿の雌が其子供を胎んで、さうして春になつて之を産むのである。此關係を考へて御覽になつても、如何に種族を保續すると云ふことの働きが氣候に影響されて居るか、言葉を換へて言へば、外界の有樣に由ていかに著しく影響されて居るかと云ふことが分るのである。即ち動物に於きましては、先づ自己の保續と云ふことが完全に行はれた後でなければ、

種族の保續に取りかゝらない。即ちエゴイズムが先づ行はれて、然る後アルトルイスムスが行はれて來るのであります。

人間の生殖

此關係が、更に進んで人間になるとどうであるかと申しますと、御承知の通り、生殖の働に一つの變化が現れて來て、交尾期はなくなつて仕舞ふのであります。さうして人間は、何時でも絶えず生殖作用を行ふべき狀態に置かれて來たのである。是は人間が人間として持つて居る所の一の大なる誇であると云ふことが出來ると思ふ。何となれば、人間が人間として立つ所以のものは、天然に支配されない事である。自分を天然の束縛より高めて、自分の意志を到る處の自然に行ひ得る

と云ふことが、是れ即ち人間の人間たる所以でありまして、生殖の働に關しても、亦唯今申上げた意味に於て、動物の生殖が頗る天然の束縛を受けて居るに反して、人間は氣候の關係、天然の供給等を脱却して、何時でも其子供を造り、生殖の働を完うし得ると云ふ性質を得たのであります。

月經の起原に關する諸說

然り而して婦人に於て「リズム」を以つて現れる所の月經と云ふ現象を目して、矢張り動物に於ける交尾期の變化したものであると說明する人が多いのでありますが、私の意見としては、是は誤つて居ると思ふ。寧ろ此月經の現れ來ること即ち此リズムを以て生殖作用が行はれ

ると云ふことは、人間が動物と違つて、天然の支配を脱却せんとする其力强い働きに依つて、自ら得來つた所の特殊の性質であることを信ずる一人であります。即ち人間は、天然の有樣がどうであらうが、夫れにはお構ひなしに、自己を完全に保續して行くことが出來るやうになり、而してそれに續いで種族を保續すると云ふ仕事も、天然の支配を脱却して、自由に行ひ得るやうになつたのであらうと信ずるのであります。

斯く人間の生殖が動物と異なり、天然の支配を脱却して所謂交尾期がなくなつたとしたならば、人間に於て何故に一定の循期を以て月經と云ふ規則正しい生殖作用のリズムが繰返されるのであるかと云ふ疑

問が起るのであるが、是に對しては、古來色々の臆說が述べられて居ります。今其一二を申せば、元來人間の身體は、或る意味に於て大宇宙（マクロコスモス）に對する小宇宙（ミクロコスモス）であります。故に、大宇宙の諸現象がリズムを以て繰返されて居ると同じ意味に於て、人間の身體の諸機能も亦リズムを以て繰返されて居るものである。例へば潮が滿す、干く、或は月が盈つる、或は虧けると同じやうな意味に於て、人間の身體に於ても、心臟が打つ、呼吸が起る、何れも皆リズムを以て行はれて居ると云ふやうな譯であります。斯る理由から致しまして、月々に繰返される所の月經の來ると云ふことは、月に關係がありはしないかと云ふことを或る學者は述べて居るのである、月が規

則正しく一ヶ月に現はれると同じ意味に於て、人間の身體に於ては月經と云ふものが現はれ、又消えるものではあるまいか。然らば何故月が人間の身體に影響するに至つたのであらうかと申すと、恐らくは太古の時代、此人間の生殖を自由に行ふために、月の夜は一つの良い機會を與へたものではなかつたらうか。夢みる如き月の夜に於て、青春の氣に充ち滿ちたる男女が互に話をする、或は月の色の麗はしきに憧がれて夜を更かす、と云ふやうなことが、遂に其機會に於て生殖を行ふやうな關係となり、而してそれが爲に、丁度其時期になつて、生殖に最も必要なる內的條件たる卵が成熟して、二十八日毎に出て來る、それが月經と云ふ現象を生するに至つた原因ではあるまいかと考を述

べて居る人があるのであります。

兎に角、如何なる關係からにもせよ、私共は人間の人間たる所以の一つとして、人間が天然にのみ依頼せずして、自己の力によつて食物を獲、自己の生存を確實になし得る樣になり、其結果として、次で又自然の束縛を脱却して、生殖と云ふ仕事も亦、動物と違つて、自分自身の意志によつて、何時でも、如何なる所でも、行ひ得るやうになつたと云ふことを以て、深く注目すべき一現象であると信ずるのであります。而かも此月經の起るに至つた原因は、今申したる如き外的關係例へば月の影響を受けて居るものであると致しましても、それが月經を起すに至つた總ての原因であるとは言へない。人間に於て月經が起

る爲には、その外的よりももつと大切な、內的原因のある事を考へなければならぬ。此內的原因は何であるかと云ふと、人間が具へて居る生殖腺であります。即ち婦人に於て卵巢が非常に大切なる意義を有つて居るのである。

生殖線の內分泌

元來生殖腺と云ふものの働きは、申すまでもなく生殖細胞、即ち男子に於ては子種すなはち精蟲を造り、婦人に於ては卵を造るのでありますが、此の生殖に直接關係を有つて居る所の、卵なり或は精蟲なりを造ることの外に、生殖腺がもう一つ非常に大切なる働を有つて居るのである。此の隱れたる作用は、比較的近代になつて初めて學者の研

究に依つて明にされたものであります。即ち内分泌と云ふことを行ひまして、或る一種の――まだ本體は十分分つて居りませぬが――化學的成分を、卵巣にせよ、或は睪丸にせよ造り出しまして、而して之を内の方、即ち血液、或は淋巴液に向つて與へるのであります。丁度胃の腺が胃液を造り、乳の腺が乳汁を造り、唾腺が唾液を造つて、之を外に向つて分泌すると同じ樣に生殖腺は或る一種の成分を造り、之を體内に分泌するのであります。斯く胃腺にせよ、唾腺にせよ其他の多くの腺は、何れも造つたものを外に導くのである、即ち外分泌をやるのでありますが、生殖腺は内分泌をやる、内に向つて成分を運び入れるのであります。又此ものが、血液に入つて循環して居ります間に、

いろ〳〵と生殖に必要なる働を喚び起すのであります。内分泌を行ふものは生殖腺の外に尙澤山にある、殊に人間に於ては、色々其ものの必要なる關係が、或は病理研究より、或は生理學的研究より致して、非常に澤山見付けられました。

此生殖腺が内分泌物によつて行ふ働は何であるか、と申しますると是は單に身體の上に影響するばかりでなく、精神の上にも、非常な影響を及ぼすのであります。之を引きくるめて申せば、男をして男たらしめ女をして女たらしめる所の色々の性質は、此生殖腺より出づる内分泌の働きに依つて起るのである。勿論、雌雄男女の大切な區別を擧ぐるならば、男性には男性の生殖腺、即ち睪丸がある、女性には女性の生殖

腺、卽ち卵巢があると云ふことでなければならぬのであります。男女の相違と云ふものは、唯單に生殖腺のみの相違ではない。例へば男子と女子とを比較して見ると、其間に、心の上に於て、體の上に於て、幾多の著しい相違があるのは明らかでありますが、此色々な相違は何故に起るかと云ふと、生殖腺の相違が卽ち此相違を喚び起す元になるのであります。此の生殖腺内分泌の働きに依つて、男は男らしい身體精神を現はし女は女らしい身體精神を現はすといふことは、色々の實驗的、或は臨床的觀察よりして證明されたのであります。

而して月經と云ふ現象も其一に漏れないのでありまして、只今も申し述べました如く、卵巢に於て卵が成熟して來ますと、それに伴つて

卵巢の中に一種のものが出來る、我々は之を黃體と呼んで居る。それが出來まして、其細胞より一種の成分を造つて、それを血液に送り出す爲に、子宮の粘膜は充血を起し遂に破れて、こゝに月經が喚び起されるのであります。斯く考へて見まするとと、人間に於て生殖作用がリズムを以て繰返されると云ふことの著しい現象たる月經なるものは、生殖腺其ものゝ働きに依るのであつて、言葉を換へて申せば、人間の身體の中にある所の一つの生理的關係よりして喚び起されるものであつて、其根柢や頗る深いのであります。卽ち内に具はつて居る所の、止むに止まれない一つの大なる原因があつて、是が起るものであると云ふことを考へなければならぬのであります。斯の如き關係から生殖

腺より出づる所の内分泌が一面に於て色々の變化を喚び起し、一面に於て心に種々なる變化を起すのでありますが、其一つの大切なるものは、即ち性慾であります。

性慾問題と其取扱方

性慾の如き、之を抽象的に考へると、全然精神生活に屬すべき働の如きものでさへ、全く生殖腺の内分泌と云ふ生理作用に關係して居るものであるといふ事は、既に前申した所によつて明らかであります。從つて此内的關係即ち身體内に備つて居る自然の要求よりして來る所の性慾問題の如きものは、單に之を抽象的の心的の問題として、例へば之を道德の問題として、或は之を宗教の問題として、或は之れを單

に哲學の問題としてのみ取扱ふことは妥當でない。我々は一面之を心的問題となすと同時に、一面之を以て一つの生理的問題即ち人間の身體に本來備つて居る所の、一つの大切なる内的の根源より湧き出る所の、汲めども汲めども盡きない泉の如きものであるとして考察しなければならぬと思ふのであります。隨つて又此大切なる、深い且又廣い根柢を人間の身體其ものに備へて居ります所の性慾問題を適當に導いて行く爲には、單に之を抽象の倫理問題或は宗教哲學問題としてのみ論ずることによつては、到底徹底の効果を擧げることは出來ないと思ふのであります。然らば則ち此の如き人間の身體的、生理的欲求に基いて居る此問題を、適當に解決して行くにはどうしたら宜しいか、矢張

り生理的の働きの上に其根據を置いて、然る後之を論じなければならぬ、少なくとも其一面は斯の如き態度を執りて考究するに非ざれば、到底圓滿なる解決を期することは出來ない、と思ふのであります。

大腦の働の二方面

元來我々の身體を統一し調和して、さうして此所に微妙なる生活現象を喚起すことが出來るのは、茲に一つの調和器官があるからである其の調和器官として、統一器官として最も必要なるものは神經系統であります。此神經系統は最も複雜なる生活體たる人間に於て、最も複雜なる最も高尚なる發達を遂げて居るのである。即ち申すまでもなく我々の腦髓殊に我々の大腦が夫れであります。此の大腦の働は、之を

二つに分けて考へることが出來るのである。一面には我々が我々の意志に從ひ、精神作用に從つて、精神作用に伴ふ生理作用の媒介によつて、身體にいろいろの機能を促すと云ふことである。此の積極的作用と同時に、其他の一面には、大腦の働は又我々の色々身體の機能を抑制して行く、即ち消極的に働くと云ふ非常に大切なる働もあるのであります。大腦があつて初めて色々の身體の機能が催進され、或は抑制され、茲に初めて斯の如きものは爲すべし、或は爲すべからずと云ふ必要なる調節調和が現れて來るのである。大腦が抑制を行つて居ると云ふことの一つの簡單なる生理的事實に關して證據を申上げて見るならば、例へば麻醉劑を服むと、其の麻醉の初期には我々の行動は或る程

度まで却つて平素よりも活潑になる、例へば酒を少し飲んでほゝ醉氣嫌になりますと活潑になる、之は何故かと云ふと、是まで諸機能に對して抑制的影響を及ぼして居つた所の大脳の働が、麻醉劑の爲に、先づ最初に麻醉し、其抑制的の働きが鈍るからであります。或は又我々は生理的反射の研究を致します場合には、何時でも大脳を切つて除けて仕舞ふのである。脊髄の機能、即ち身體の反射機能を研究致します場合に、大脳を全く除けて仕舞ふ、其後でなければ純然たる反射機能は現れて來ないのであります。大脳がありますと、其の大脳の抑制的影響の爲に、機械的反射作用が十分起つて來ないのである。此點を考へて御覽になつても、彼の大脳と云ふものが、一面抑制的、消極的

の働の上に、如何に大切なる意味を有つて居るかと云ふことが分るのであります。斯る意味から我々は性慾といふものを愼重に取扱はなければならず、且つ斯る立場から之を論及しなければならぬと思ふのである。我々の身體の中に生理的根柢を有つて居るものは、矢張り生理的機能に依つて是が解決を期して行かなければならぬと思ふのであります。

大脳が發達し之に依つて自分の意志に從ひ、身體の色々の機能を調節し、即ち一面に於て之を鼓舞し、積極的に影響すると同時に、之を抑制する消極的働きを及ぼして抑制すると云ふこと、自分自身の意志の鍛錬、即ち言葉を換へて言へば、自覺と云ふことがあつて初めて出

來ると思ふのであります。私は斯る意味から性慾問題を根本的に解決して行かうと云ふのは、勿論宗教或は倫理、或は法律の如きものが必要でありませうが、就中性慾問題に於て、最も必要であるのは生殖作用に關する各自の自覺であると云ふことを、斷言致したいのである。私は以下斯る意味に於ける生殖問題に關する自覺を論じて見たいと思ふのであります。

生活體は不死なり

元來此の生殖作用なるものは、之を生物學的に論じて如何なる意義を持つて居るのであるかと申すと、其の根柢は頗る深く、そして遠いのであります。先づ我々は、最も簡單なる唯一の細胞、しかもそれが

一つの生活體を爲して居ります單細胞生物の、其遠き昔に遡つて、我々の生殖作用の實際を見ることが出來るのであります。佛蘭西のモーパーといふ人は、此生活體は一體死すべき運命を以て居るのか、また死すべからざる運命を有つて居るかと云ふ問題に關しまして、實驗的の研究を致します爲に、最も簡單なる最も其分化の程度の進んで居ない原始的其儘の生活體、即ち單細胞生物を捕へて實驗を行ひましたが此の單細胞生物が、其個體を殖して行く有樣を見ますと、謂はゆる單性生殖、單なる性の生殖と云ふ方法を執つて居るのである。即ち此所には何等雌雄の區別はなく、唯一個の單細胞生物が二つに分れる、其二つが又四つになり八つになり、十六、三十二、六十四と云ふ風に、唯

一つのものが二つ宛に分裂しまして、さうして新しい個體を生じて行く事を知り得たのである。若し果して斯の如く單細胞生物と云ふものは一つが二つになり、四つ、八つ、十六と云ふ風に無限に其分裂を續けて行くことが出來るのでありますならば、生活體は不死であると云ふことを斷定し得ませう。即ち生活體の本來の運命は死すべからざるものであると云ふことを、實驗的事實よりして斷言することが出來るのであります。

モーパーの檢査

モーパーはそれを檢査しやうと致したのである。そして單細胞生物例へば草履蟲、或は草鞋蟲と云ふやうなものに付て試みたる結果、或

る數百代單なる分裂を繰返して一つの單細胞生物個體から、無數の個體に分裂しますと、最早それ以上分裂增殖する能力はなくなつて仕舞ふのであると云ふことを見たのであります。

是の關係は單細胞生物に依つて多少趣を異にして居りますが、大體申しますと、先づ約二百世代分裂を繰返しますと、最早其儘では分裂增殖して行く能力は失はれて仕舞ふのである。二百世代と言へば頗る少ないやうであるが、考へて見れば一の細胞から二の二百乘丈けの多數の細胞が增殖するのでありますから、實に驚くべきものであります併ながら其位まで增殖が行はれますと、唯其儘で置きましたならば、最早分裂增殖する能力が失はれて仕舞つて、ずん〳〵死んで仕舞ふの

である。けれども此處に、此自滅を救ふべき一つの救世主が來るのであります。

それは何であるかと申すと、若し斯の如く、或る世代まで分裂をくり返した時に、もう元氣が消耗して仕舞ひ、分裂する能力が失はれたと云ふ場合には、夫の各個體を別々に置かないで、一緒にして置くと各個體が二つ宛相近づいて口で以て接吻を致すのである。而して其の際に自分の身體にある成分、即ち小さい核の部分を互に交換するのであります。然る後互に離れる、さうすると、又再びそれが分裂增殖して行くべき元氣を回復するのである。即ち斯の如くして此簡單なる機能に依つて、老衰自滅せんとする細胞が茲に再び若返へるのであります。

此口と口を接吻して身體の成分たる小核の一部分を互に交換すると云ふことは、取りも直さず高等な生物に於て雌雄二つの生殖細胞が互に近付きまして、互に合體して一緒になると云ふことと同じである。斯く考へて見ますと、生殖と云ふ仕事に依つて、生物體は初めて不老不死となり得るのであります。

尤も此モーパーの研究の成績に對しては、近頃多少の反對もあるやうでありますが、先づ大體の事實は誤りないのであつて、即ち或る世代分裂を繰返した後はどうしても生殖作用即ち二つの個體が互に近付いて、身體の或る成分を交換しなければならぬ、然らずんば遂に自滅に陷つて仕舞ふことになるのであります。即ち生活體を自滅より救ふ

所の最も惠み深い、最も力强い手は、何であるかと云ふと受精作用と云ふことでなければならぬのであります。

斯る關係から考へて見れば、生殖作用は非常に意義深いものであり生殖作用がなければ生物體と云ふものは絶滅して仕舞ふのであります。凡て生物體が幾百年を重ね、幾百萬年を經過して、能く其種族を保續して、さうして今日の如く、或は又將來に於ても、永く此生を享樂して行くことが出來る原因は、一に此生殖作用の賜に外ならぬのであります。

生殖細胞と體細胞種

此の生殖作用は、個體が漸次複雜なるものとなり、唯一つの細胞で

なく細胞が數多く集つて複雜なる有機體となりますと、此處に多少趣を異にして來るのであります。即ち其合體に依つて新しい個體を造る所の生殖を爲し得べき細胞が、多數の細胞中或る特別なるものに限られるのであります。卽ち身體の中の或る特別なる細胞だけがさう云ふ運命を持ち、他のものは斯る運命、斯る能力を有つて居ない樣になるのである。此合體することに依つて種族を保續する所の細胞が、卽ち申上げるまでもなく生殖細胞であります。

之に對して生殖細胞たらざる他の大多數の細胞は、其個體の一生を保續して行くに必要な仕事をして行くのでありまして、生殖細胞に對して、之を體細胞と稱するのであります。體細胞は一定の時の後には

其の機能が衰へる、是れ卽ち其の個體の死である。之に反して生殖細胞は合體して新個體を形ち造ることによつて代々活き延び、子より孫と代々絶える事はないのであります。卽ち不死であります。

此生殖細胞が下等なものに於きましては、別に大きさに於て又外見に於て變らないのであるが、高等なものになりますと、一つは比較的大きくなる、この大きくなると云ふのはどう云ふ意味であるかと云ふと、其中に榮養物を造つて貯へまして、さうして受精によつて出來る子供を養ふに必要なる準備をするのである。それに反して他のものは小さい、然しながら小さいが故に活潑であります。卽ち活潑に動いてさうしてアクチーブに大きな細胞を求めて、其中に這入り込んで合體

を遂げると云ふことになる。斯の如くして卵と云ふものと精虫と云ふ雌雄兩樣の生殖細胞區別が出來て來るのである。其の兩樣の生殖細胞を製造する所のものが卽ち生殖腺でありまして、是が下等なものに於ては、同一個體に於て雌性と雄性との生殖線、乃ち卵巢と睪丸とが存在して居る。之を雌雄同體と云ふのである。然るに動物が一層進化すると、卵巢は卵巢だけ、睪丸は睪丸だけを持つた個體が出來るのである。而して此れ卽ち雌雄或は男女となるのである。卽ち此意味から考へて見ましても、婦人は生殖に對して受動的であり、男子は能動的のものである、アクチーブのものであると云はなければならぬのであります。

元來前に述べた通り、生物の仕事の大なる二つの方面としては、一つは種族の保續であり、他は自己の保續であるが、此の兩者に於てどちらが重きを爲すかと申しますと、種族の保續と云ふことが寧ろ重きを爲さなければならぬのである。何となれば、或る意味に於て我々の一個體即ち一代の生活は、是は假りの宿であります。此假りの容器の中に本當に不死の運命を擔つて居る生殖細胞が容れられて、代々傳へられて生き永へて行くものであると考へなければならぬのであります。一個體は早晩死滅する者である、其最後の運命は遂に屍體となつて墓場に埋められるのである、併ながら此の個體の中に容れられてある所の種族の保續維持に役立つて居る生殖細胞は、永遠に生き永へて行く

のである。斯う考へると、通常は雞が卵を產むと云つて居るのは實は間違であつて、實際は卵が雞を產むのである。雞の體は假りの宿である、雞が雞として地球上に永遠に其の生を享有し得る所以は、卵があるからである。

さて斯の如き大切なる生活の眞髓、生物體の生命を永遠に傳へて行く最も大切なる生殖作用と云ふことは、今申しましたやうに、二つの生殖細胞が相合體して若返へることであります。若返つて、さうして古くなつた體細胞が死んで仕舞つて、若返つた生殖細胞が再び新しい花を咲き、新しい實を結ぶと云ふことに歸着するのでありますが、此合體即ち受精と云ふ大切なる仕事を圓滿に遂行すべく、玆に種々必要

なる大切なる關係が、身體の上に於ても、又心の上に於ても起つて來なければならぬのである。而して其中でも大切なる事柄は何であるかと云ふと、即ち性慾である。性慾と云ふことが、此の合體を遂げしめて個體を若返らす上に於て有力な媒介となるのである。即ち雌雄、男女を結び付けて、之を密接に離るべからざる一つの單位として括り付けるのであります。

茲に於て我々は、性慾といふ生理的心理的現象を、最も嚴肅に考へて見る必要が起るのであります。

生殖と個體の生命

性慾は前申し述べました如く、男女雌雄の生殖線其ものゝ働きによ

つて生ずる内分泌物が、神經系統を刺激することによつて現れ來る力强い一つの欲求に外ならぬのであります。此の内的の力强い大切なる性慾が根柢となつて、外的の關係も之に相伴つて、初めて生物の命を永遠に繋ぐ所の生殖、繁殖といふことが出來るのであります。かるが故に、場合によつては此個體と云ふ殿堂よりも遙に大切なる御神體たる生殖細胞の合體によりて起る種族保續の爲に、即ち言葉を換へて言へば此種の保續に必要なる戀愛と云ふ「アルトルイスムス」の前には自個體の生存てふエゴイズムは、恰も風前の塵の如く輕々に犧牲に供せらるゝのである。さう云ふ例は、たとへば動物界の現象等を觀察しても直ちに分るのでありまして、昆虫等の壽命が屢々生殖作用に依つ

てのみ定められる場合の如き、即ちそれである。

例へば蜜蜂の如きは、女王が御承知の通り生殖を司る所の唯一の雌でありますが、雌が交尾期になりまして空高く飛び、そして其際に無數の雄の蜂がこれに伴つて上つて、或る一つが生殖を遂げる。さうしますと最早多くの雄は要らないものになる。すると直ちに殘つて居ります所の此の多數の雄は刺し殺されて仕舞ふのであります。即ち雄の命と云ふものは生殖を行ふと云ふ其の瞬間に於て決定されるのである。斯の如くして段々と生殖の關係が重きを爲すに至りて、遂に謂はゆる戀愛と云ふ利他主義が饑餓と云ふ利己主義を征服するのであります。而して此戀愛が饑餓を征服して、其の力強い發展を遂げることが、

又人間の如き精神生活の旺盛なる者に於ては、殊に其交渉が複雜になり、又色々なる色彩を以て現はれ來るのであります。而して此生殖の働に最も重大なる關係を有つて居る性慾生活と云ふものは、單に生殖作用其ものに對して非常に大切なる關係を持つのみならず、利己主義即ち自己生存の如き强烈なる欲望すら遂にそれの犧牲となる場合があります。殊に人間に於ては、戀愛があらゆる社會的生活の根柢を形造ると云ふ事になつて來るのである。動物に於ては、假令性慾が盛であり、而して其結果として生殖作用が非常なる强さに於て現はれ來る場合がありましても、何方かと言へば矢張りエゴイズム即ち自分を生存して行かうと云ふことのみが、或る程度まで强い傾向を有つて居るの

である。

さう云ふ例は澤山ある。例へば蜘蛛の如きものに於て、我々は面白い例を擧げることが出來るのであります、蜘蛛は言ふまでもなく雌と雄がありまして、其交尾に依つて生殖の仕事が爲されるのであるが、蜘蛛の雄が交尾をすると云ふ時は、蜘蛛の雄に取つて最も危險なる時期である、何となれば其交尾の際に蜘蛛の雌に依つて屢々雄が食ひ殺されて仕舞ふのである。斯う云ふことは、人間に於ても或る場合にはあり得ることゝ思ふのでありますが、兎に角さう云ふ關係が、動物に於て生殖の機能と云ふものがあるにはあるけれども、それよりももつと力强い意味に於て自己の保續エゴイズムが現れると云ふことを、我

々に示すものであります。併ながら、段々と精神生活が複雜になつて來、而して殊に又此性的生活と云ふことが唯一時的でなくなり、性慾關係が人間にありては、動物の如く唯一時の衝動で、瞬間的に滿足され、短時間に其總てを了るが如き簡單なる者でなくして、永續的性質を帶ぶる樣になつて、茲に初めて永續的男女の結び付きと云ふものが自然の勢として其の間に生じて、而して夫婦より子供が生れ、夫れが又永續的に結び付いて一個の家族を造ると云ふことになりますと、利己主義が利他主義、即ち饑餓が戀愛に讓歩しなければならぬと云ふことになつて來るのであります。即ち同情とか博愛とか云ふ觀念が起るのも、之を其源に遡つて見ますと、恐らく性慾と云ふことが其最奥の

根源である。生殖を行ふことによつて初めて、或は雄が雌に對して、或は男子が婦人に對して、心配し同情を持つと云ふ事になる。此同情を持つことに依つて力強い男子の力に婦人が賴つて、安全に其の生殖保育と云ふ天職をやることも出來る。又其產れた子供と云ふものも、此同情に依つて初めて十分に育つて、其生を全うすることが出來るやうになつて來るのであります。

倫理思想もこゝに湧く

斯樣にして同情、博愛即ち廣い意味に於ける倫理思想と云ふものは、即ち夫婦が初めて結び付いて、而して其間に子供が出來、永續的に一家が保たれて、其所に初めて涌いて來るものであると云ふことを

考へなければならぬ。而して斯の如く永續的の愛情、永續的の變愛と云ふものが出來て來る結果として、茲に又義務と云ふが如き觀念も起つて來なければならぬのである。即ち男子は—動物で言へば雄は—自分が保護すべきもの、自己の力の保護の下に置かれて居りますものに對して、出來るだけのベストを盡すと云ふやうな觀念も初めて涌いて來るのである。さうして其ことが心よりして喜を與へ、茲に於てか進んで自分を犧牲に供して、其高尙なる義務を果すと云ふやうな倫理思想も其處に胚胎して來るのであります。或は男子が男子としての特性、即ち勇氣と云ふやうな道德的觀念も、今申上げました如く、弱いものを保護すると云ふ義務を感じて、其所に初めて力強い、根強い根柢を

持つことになつて來るであらうと考へるのであります。

斯く考へますと、性慾と云ふ問題其ものは、勿論我々人間を初めとして有らゆる生活體の存在の上に、自分を持續して行くといふ此大事なる仕事を爲す上に、最も大切なる手段であると同時に、又人間が社會生活をして動物よりも一段高尚なる生活を營む所の根柢であると云ふことを信ぜなければならぬのである。其意味に於て性慾問題は二重の重さを加へ、二重の價値を有つて居ると信じなければならぬと思ふのであります。

シルラーの『鐘の歌』

さて斯の如き大切なる性慾よりして湧き出る止むに止まれぬ衝動、

それは斯の如く大切であると同時に、之を良く導くか、良く導かないかと云ふことは、又最も愼重に考慮しなければならぬ所の問題であると考へるのであります。私は此性慾問題 Das Lied von der Glocke を思ふ度に、何時でもシルラーの有名な『鐘の歌』を思ひ起さずには居られないのである。あの千古の傑作たる『鐘の歌』を御讀みになりますと、永遠に亘つて人生を貫いて居る所の最も大切なる此問題を、實に美はしき言ひ現し方に依つて我々に敎へて居る。私は此の歌を讀む毎に、まざ〳〵と『人』の一生を眼前に髣髴させる一幅の繪卷物に對する心地で、感極まつて涕涙を禁ずることが出來ないのであります。私は此所に今申し述べたる意味、即ち如何に性慾と云ふことの問題が大

切であつて、而して之を取扱ふ事の宜しきを得ると得ないと云ふ事が、人生問題の上に非常に重大なる意義を有つて居るかと云ふことを、シルラーの次の一句を借りて申述べて見たいと思ひます。

Wohltätig ist des Feuersmacht,
Wenn sie der Mensch bezähmt, bewacht,
Und was er bildet was er schafft,
Das dankt er dieser Himmelskraft;
Doch furchtbar wird die Himmelskraft,
Wenn sie der Fessel sich entrafft,
Einhertritt auf der eigenen Spur,

Die freie Tochter der Natur.

シルラーの『鐘の歌』の中にある此の一句は、火の力に就て述べてゐるものであります。火といふものは、實に惠み深いもので、人が此の火といふ天然の力を能く馴して、よく注意して使用する時は、感謝に堪へない、實に惠み深い働を與へて呉れるものであるが、然し人間が偶々之を疎にして、火それ自身の衝動に委せて、暴れ放題に暴れしむる時は、それこそ大變、實に恐ろしいものであるといふことを述べて居るのであります。之は、我々人間の心の中に、止むに止まれない內的關係よりして燃え出る所の火、即ち性慾といふものに對して、能く其の意味を現して居ると思はれるのであります。即ち、其天然の火

の力に比すべき性慾を如何に制御して行くかといふ事は、實に重大な問題であります。

古來、人は火を使用する動物であると言はれて居りますが、此の火を巧みに、自分の目的に向つて能く使用して行き、それによつて價値ある生活を營むと同樣に、否な寧ろ夫れ以上に、自分の心の中に湧き出る性慾の情火を適當に制御し、注意深く守つて行かなければならぬと思ふのであります。

結婚問題

之を要するに性慾は、生物殊に人間と云ふ精神生活の最も旺盛なる生物を一貫して、絶えず色々の色彩と色々の交渉とを保つて現れ來る

二つの大なる緯と經(タテイトヨコイト)たる、エゴイズム、アルトルイスムス、卽ち利己主義と利他主義の交渉に外ならぬと思ふのであります。然り而して動物の如く生活が比較的單純である場合には、利己主義が重をなすけれども、人間の如く、獨り現在に活くるのみならず、過去に遡り將來に至つて活きて行く者に於ては、前に申述べた意味に於て、生物體が自己を保續して行くと云ふこと丶、種族を保續して行くといふ二つを秤に掛けて見る場合に、どちらが重をなすかと云ふと、種族を保續して行くことが重きを爲して居る。故に人間に於ては、性慾問題は利己主義卽ち自我を擴張すると云ふ意味に於て働くよりも、寧ろ人間全體、種族其ものを保續すると云ふ意味に於て働かねばならぬのである。是

れ即ち今日の此講演の主なる目的たる結婚改善問題となつて現はれて來るのであります。

處で結婚とは何であるかと云へば、即ち此の人間生活に尤も大切の性慾の働きを具體的の意味に於て結び付けた所のものであります。此結婚は、前に述べた如き關係から、人間の生活が割合に單純であつた昔に於ては、專ら利他主義即ち言葉を換へて言へば、自分自身の擴張と云ふことよりも寧ろ或は家の爲めとか、或は一族の爲めとかに行はれ、結婚と云ふもの丶目的は子を造る爲めである、家產を讓り渡す爲めである、健全な子孫を造つて而して祖先に對する十分なる責任感から、家を維持して行くが爲めであると云ふやうな意味に於て、爲され

て居つたのであります。然る所、現在の如く人知が進んで來、人間が各々自我と云ふ者に付て自覺致しましたる今日に於ては、此結婚問題に關する人間の考は餘程變つて來、又目下變らんとしつ丶あるのであります。

現下の思潮は、エゴイズム即ち利己主義が自分を犧牲に供して、或る一つの他のもの丶目的に向つて力めると云ふアルトルイスムス即ち利他主義を排斥して、力强く其目的を達せんとする樣な傾向を示して居るのである。斯くして現代の性慾問題は、新らしき色彩を帶び、新しき欲求を追うて、我々の目前に現れ來つ丶あるのである。其第一は何であるかと申しますと、經濟的結婚、即ち金の爲の結婚、財產の結

婚である、其の第二は自由結婚であり、第三は性慾の濫用と云ふことであります。此三つが今申し述べたる如く、人間が自我と云ふことに付て非常に大なる自覺を持ち、寧ろ利他主義を排して利己主義を擴大せんとする思想から新たに結婚に加へられたる色彩である。

黄金の結婚

先づ第一に、此ゲルドハイラート即ち金の爲に結婚すると云ふのは、どうして起つたのであるかと申せば、言ふまでもなく生活が非常に困難で逼迫してゐると云ふことが、其根柢を爲して居るのであります。現在は資本主義卽ち資本が跋扈する世の中であり、資本を有つて居りまする者は、何等の能がなくても安全に生活を保つて行くことが出來

るのである。然らば、資本家と云ふものはどう云ふ所からして斯の如き勢を得て跋扈するに至つたのであるかと考へますれば、人間の智慧が進歩致しまして、此智慧が具體的に機械となつて現れ、勢ひ生產といふものが手から機械に移り、非常に大きな會社組織が出來る、即ち資本が跋扈すると云ふことになつて來たのである。此資本が跋扈する場合には、富の分配に不平均を來し、富める者は益々富み、貧しきものは益々貧しくなると云ふ、好ましからぬ現象を起すのであります。斯の如くして中產階級の人々は資本主義の爲に段々侵蝕され、益々生活難に陷り、或る者は幸にして上に行き、或る者は下に下つて仕舞はねばならぬやうになつて來ます。斯る餘裕なき近代的生活に於て、結

婚して生殖の仕事を安全に行ふ爲には、どうしても自己の生存を先づ以て保證することが何より大切である。即ちエゴイズムと云ふものが先づ以て行はれなければならぬ。一面又人知の發達と共に享樂機關も發達し、衣食住共に善美を欲求する心は日日と旺盛になる。而して此の欲求を滿足すべき尤も有力なる手段は黃金である。斯の如くして人は金錢萬能主義になる、黃金崇拜主義になる。斯る關係に於て、黃金と云ふものが非常に尊いものと爲り、節操も黃金の前には力がなくなつて仕舞ふのであります。斯る關係の下に、結婚も亦さうした色彩を帶びて來ることは已むを得ないのであつて、此風潮は現在の生活から して導き出だされたる自然の傾向であると言へるのであります。併し

ながら結婚の本來の目的、性慾本來の大目的と云ふものは、決して黃金と結び付けるべきではない。斯る意味から申しますならば、我々は現代の風潮たる黃金の結婚と云ふことを以て決して滿足すべきものでない。黃金結婚は結婚の本來の大目的とは背馳した考である。我々は此の風潮を以て、現代の逼迫せる生活が人間に下したる一つの不幸であると信ずるのであります。尤も今日の生活狀態の下に黃金を全然度外視することは出來ないが、併ながら謂はゆる黃金の結婚は、單に冷たき黃金なる物と結婚せんとするのである。卽ち黃金を得て、之に依つて自己の安逸を貪り、享樂主義を滿足させると云ふやうなことが、結婚の主なる目的にならうとする傾がある。是は實に悲しみに堪へざ

る次第であります。殊に大戰爭以來、世界の經濟界と云ふものは非常に困難の狀態に立ち至りました。そして自己本位、利己主義は、時々刻々我々の頭の上に、秋の空の黑雲のやうに押しひろがつて來て居るのである。斯る時代に於て、さなきだに黃金に左右せられんとしつゝあつた結婚問題が那邊に向つて其歸結を求めるか、其價値を定めるか、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあるのであります。此意味に於ても、亦現在は生殖に對する一大危機であると云ふことを考へるのであります。

自由結婚

さて、其の次に考ふべきは自由結婚である。自由主義は、現代文明が各方面に向つて力ある向上發展をなす間に生れた尊い產物でありま

す。時代の趨勢に伴うて、人類が自由の二字を要求すると共に、それが又生殖問題の上にも現れて、其處に力强き自我を表現せんとする自由結婚が生れたのであります。

斯の如くして、是までの自己を沒却した、一家一族の爲の結婚であつたが如き色彩を帶びた舊時代結婚が、漸次個人と個人との結婚、人格と人格との結びつきに變らんとしてゐるのであります。是は勿論、或る意味に於て、非常に喜ぶべき事柄でなければならぬ。結婚と云ふことの本來の目的は、申上げるまでもなく、一面から言へば種族の保續と云ふことにあるのでありますが、然しながら又一面から言へば、自分と云ふものが擴充され、更らに新らしき我を造るのである。前に

述べた樣に、生殖上にも外界の束縛を脱却して行くことが、人間の他の動物に優れた處である。さうするには、結婚と云ふ意味が人格と人格の結付たものでなければならぬと云ふことになるのである。其意味に於て自由結婚も非常に喜ばしい現象であると云へるのであります。

併ながら自由結婚と云ふことは、一面に於ては、又恐ろしい弊害を釀さんとして居るのである。それは、唯個人と個人との結び付き、或は單に自我と云ふものにのみ餘りに重を置き過ぎて、即ちエゴイズムのみが蔓り、一面アルトルイスムスでなければならぬ我々の此結婚の本旨を、全然蹂躙し去らんとするやうな極端な傾向が現はれ來るからであります。是は我々が最も愼重に考察して、其弊害を除き、其害毒

を少なくするやう十分に努力しなければならぬと信ずるのであります。元來前にも縷々申し述べました如く、生殖と云ふことの働きは、自己の生存でないのであつて、種族の保續である、斯る意味から申しますならば、生殖の爲には自我を餘程讓歩して、一家一族であるとか、或は國家であるとか、民族であるとか、更に廣く言へば人類全體であると云ふ「アルトルイスムス」の爲に、自己の利益自我の擴張と云ふやうなことを犧牲に供しなければならぬのであります。例へて申しますならば、結婚をするに當り國家が適當に干渉をなす、例へば玆に非常に好ましからざる稟性を有て居る者があり、斯の如き「自我」の保續が一家の不幸であり、國家の不幸であり、大にしては人類社會全體の不

幸であると言ふ場合、宜しく斯の如き自我の擴張を斥けて、而してさう云ふ者の結婚、さう云ふものゝ生殖と云ふことに國家が干渉して、其繁殖を制限し抑壓する事の必要を認めるのであります。又さうしなければ人間全體として眞の幸福は望まれないのであります。

要するに極端なる自由主義の結婚、自我と云ふことだけを眼中に置いて結婚すると云ふことは、戀愛神聖主義と云ふやうな立場から論じたならば、或は非常に價値のあるものでありませうが、併ながら之をもう少し廣い立場から、人類全體の幸福と云ふ意義から觀察しましたならば、頗る考慮を要するもので、一面に於て非常に大きな弊がある

と云ふことを考へなければならぬ。又實際に於て極端なる自由戀愛說自由主義の結婚と云ふことは、到底出來ないことである。何となれば結婚と云ふこと其ものが既に唯一つの個體ではない、二つの個體が結び付いて初めて出來るのであるから、極端なる自我所謂利己主義は、到底相互的に互に結び付くと云ふことと相容れないのであります。今からして十數年前でありましたが、亞米利加のハーソン夫人が、所謂試驗的結婚トライヤルマリエージと云ふことを唱導して、一時社會の耳目を驚かしましたが、其說は、結婚に依つて人間の自我を滿足せしめやうと云ふのには到底一度や二度の結婚では出來ない、先づ假りに結婚して見て嫌だつたら離れる、又第二者と結婚する、又嫌だつたら離れる、さうして滿足するまで相手を選ぶ。それでなければ、とても

滿足する結婚は出來ないものであると云ふことを主張したのである。是は極端なる自由結婚主義で、斯の如きことを人間に許すならば、人間生活は卑しむべき動物生活に逆轉するものであると言つてよからう。我々は勿論一般の自由結婚主義に於て、人格と人格の結合が本統の自覺に依て出來るのならば斥けはしないが、併しながら一面に於て戀は盲目なりと云ふ諺が示すが如く、極端なる自由結婚主義は往々にして謂はゆる盲目に陷り、その戀の爲に不幸を招くのであります。又それに反して、我が國に於て古來行はれました樣な、或る意味に於ては驚くべき極端なる非自由結婚主義が、往々にして隨分圓滿な家庭を造り、結婚としての理想を滿足に遂行し得る場合が幾許もある。即ち結

婚する前に男女が互に知らないでも、幸にして男女が互に健實なる思想を持ち、十分なる素養を積んだ人でありまするならば、結婚した後に互に本統に理解し合つて本統に愛することが出來る譯でありますから、必ずしも自由結婚主義が理想の結婚であるとは言へない。又非自由結婚主義必ずしも排斥すべき結婚であるとも言へない。要するに、今申上げました如く本當に意義ある結婚をなすとなさぬとは、各自の結婚に對する自覺の有無に存して居ると思ふのであります。殊に私が今の秋に當つて、自由結婚主義に對して大いに警鐘を亂打しなければならぬと思ふのは、即ち世界は今や一千五百六十七日の日子と、而して三千億圓の經費と、殊に八百萬人の生命とを犧牲に供して、千古未

曾有の大戰爭を終つたのである。此戰爭に依つて人間に加へられたる大いなる傷を癒す者は何であるかと言へば、それは即ち大なる「愛」の手でなければならぬ。即ち生殖と云ふ愛の神の手に依つてのみ初めて此の大なる傷を癒すことが出來るのである。斯る際に於て、結婚はどう云ふ意義を有つて居るか、即ち結婚は固より一面に於て自我の生存と擴充とを考へなければならぬと同時に、もつと廣い意味に於て民族間、更に廣く言へば人類と云ふもの丶繁殖を眼目として、此の傷手を癒やすと云ふことを主要なる目的としなければならぬと思ふのであります。此意味に於て、極端なる自由の結婚は決して理想とすべきものではない、即ち或る意味に於てユーゼニックス、即ち人種改善論者の

唱へる如く、國家が之に參與すべき必要があり、結婚に對する適當なる干渉を加へ、さうして善良なる道に之を導くことが非常に必要であると信ずるのであります。

性慾濫用

次に第三の問題は性慾濫用といふ事であります。此の性慾濫用といふ事は、矢張り時代の產物であると私は信ずるのであります。蓋し近代生活の特色と云ふものは、人間の智慧が進むことに依つて、人間が色々の自然を征服した事にあります。其處に、人間は一面に於ては是までの人の曾て知らなかつた樂をも享けることが出來、或は又、夏を冬に、冬を夏に變へることも容易に出來るやうになつた。斯くてあら

ゆる方面に享樂を擅にすることが出來るやうになつた。そして其の半面に於て人間の生産力が高まりました。是等は皆近代文明の賜物でありますが、それと同時に、人間は苦しい立場に立ち至つたのである。即ち時々刻々目の前に來る色々の慾望と云ふものが、世の中の進むと共に愈々深く且强くなり、之を滿足せしむる事が又愈々益々困難になつて來たのであります。

即ち人間は、二六時中限なき欲求の幻影を追うて、心と身體とを苦しませねばならぬことになつた。而して神經衰弱者が續出する。ために此疲勞せる、いら〳〵せる人間の心と身體とに慰安を與へるには、非常に峻烈なる刺戟を要するやうになつた。極めて短い時間に於て而

かも强烈なる享樂をしなければならぬと云ふやうになりました。

斯る場合に於て、最も適當したるものは何であるかと云ふと、性慾による享樂の滿足であります。併ながら一面に於ては、前述の如く經濟的の保確が得にくいため、結婚と云ふ正しい手段に依つて此性慾を滿足することが出來ない。玆に於て、正しからざる手段に依つて性慾を滿足させると云ふことが、近代的享樂の强い傾向となつて現れて來ざるを得ないのであります。近來醜業婦が跋扈して居るのは十分に之を證明してゐます。

今統計に就て申しますれば、例へば伯林大學學生の如き、四年間の生活に淋病に罹つて居るものは百プロセントで、一人も罹つて居ない

ものがないといふ仕末、勿論之には一人で二度も三度も罹りたる者もあり、或は毫も罹らぬ者もありませうが、兎に角百名にあまる多數となつて居る。更に統計に依りますと、十八歳から二十八歳になります伯林の商人では、此花柳病に罹つてゐる者が百二十、それも微毒に罹つて居る者が十七パーセントとなつてゐる。我が日本に於きましても、之に類するやうな驚くべき統計が擧げられて居るのであります、例へば日本に於て公の取締を必要とする婦人の數は約二十萬人居る。其の中明治三十四年に檢擧された五千三百七十三人中、千百二十九人は有毒者であつた。即ち約五人に一人は毒を傳へる危險性を帶びて居る。明治三十四年の娼妓の數は約四萬六千人であつて、遊客の數は一千四

百九十五萬人に上つて居る。しかも此の遊客の百人中、十二人は有毒であると見てよいと云ふことである。此の統計は古いが、亦以て如何に花柳病傳染の恐るべきかを想見することが出來る。此恐しい病氣、一家の幸福を破壞し、一身の生命を短縮し、はては一命を絶滅するやうな病毒が、到る處陷穽を造つて性慾に飢ゑたる人間を待つて居るのであります。實に戰慄せざるを得ぬ次第であります。而して又之に關聯致しまして、不自然なる方法による性慾の滿足、即ち手淫が非常に盛に行はれることになつて來た。勿論手淫と云ふやうなことは、內的の衝動の爲に喚起されるのであつて、或る意味から云へば自然の結果であるとも言へませうが、併ながら一面から言へば、外的關係が刺戟

を與へて性慾の不自然滿足を迫り、つい手淫を爲さざるを得ないことになる場合もあります。

手淫が如何に廣く擴つて居るかと云ふことに付て、色々統計もありますが、斯の如きことは人が皆秘密にすることでありますから、十分嚴格なる統計は取れませぬけれども、ベルゲーと云ふ人の如きは、『百人あれば九十九人は現に手淫をして居ると自白する、而して最後の一人は、實際に於て手淫をして居るが、唯しないと言つて頑張つて居るに過ぎぬ』と言つてゐる。此言に依つて、手淫と云ふものが如何に廣く擴つて居るかと云ふ事が分るのであります、而して此手淫と云ふものが一體どう云ふ影響を及ぼすものであるか、愼重に考へなければな

らぬ。古く英吉利のベッカースと云ふ人、チッソーといふ人などが、十八世紀から十九世紀の初めに掛けまして、極端に手淫の害を書いて居ります。是は手淫を戒めたと云ふことの結果から言へば、私共賞讃するのでありますが、一面から言へば爲にする所があつてやつたのであります。極端に手淫の害を書き竝べて、多數の手淫をやつて居る人を脅して、さうして自分の藥を賣り付けて儲けやうとしたのである。斯う云ふことが陰に隱れて居るのでありますが、兎に角、手淫が精神的にも肉體的にも、非常な惡影響を及ぼしてゐる事は、敢て私が申すまでもないのであります。卽ち手淫の實行者遂行者は、良心の苛責から陰に引込んで、公明の所に出ることを嫌ひ、勇氣が銷沈する、さう

して遂には救ふべからざる神經衰弱になつて來るのであります。然しそれも、年頃の男子の元氣が充ち滿ちて、反射的に漏れてくる場合、例へば無意識的の夢精のやうな場合、或は之に類して、自然の內的衝動の結果として、止むに止まれない自然の要求から起つて來る場合であるならば、大して害はありませぬ。と言つて自分は決して手淫を勸誘する譯では斷然ないのであるが、昔の醫學的或は通俗的書物が、往々手淫の害を極端に高唱して居るのに對して、近代的研究の結果を紹介するに過ぎません。更に私は此處で手淫の害を十分述べて置きたいと思ひます。

恐るべき手淫の害

一體手淫は、飲酒家が酒に溺れると同樣で非常に過度になり易いものであります。それは前に申し述べたる如く、近代的生活の結果として、人が非常に强烈な刺戟でなければ滿足出來ないため、一層不自然なる手淫を行ふといふことになり、從つてどうしても非常に過度になる。其結果は身心の上に尠なからざる害を及ぼすのであります。殊にさう云ふ人に取つて最も不幸なることは、自分が後になつて結婚をなし、自然な正當なる意味に於ての性慾の滿足、生物として最も大切なる仕事をやらなければならぬ時に、十分なる滿足を得ることが出來なくなる。例へば生殖器が非常に過敏になりまして、十分樂を享くることが出來なくなる、即ち過度の手淫の結果が生殖器の過勞を起しまし

て、啻に性欲の滿足を得る事が出來ないのみならず、遂には生殖と云ふことに迄又大なる障害を起すやうになる。それが延いては非常な神經衰弱、ヒステリーと云ふやうな狀態を起すのであります。殊に手淫をした者が狂人になつた事實もありますが、それは手淫をする故に氣違ひになるのではない、さう云ふ精神の薄弱なるが故に手淫をするのであると說く人もあるが、兎に角何れにせよ十分愼まねばならぬことは言を要せぬ。さう考へますと餘程愼重に考へなければならぬ。克己抑制の意志の弱い人間が、直ぐ性慾の情火に負けて仕舞つて、欲求に委して仕舞ふといふことは、恰も火が人間の手を脫して暴威を逞うするのと同じく危險千萬であります。

さう云ふ意味から申しますと、手淫の害は恐るべきものである。殊に長壽を望む者は、前に述べた生殖腺が大なる關係を有つて居るものである故に、手淫ばかりでなく性慾を過度に行ひますと生殖腺が弱る、弱ると命を短くすると云ふことになるのであります。世の中には、年を取ると生殖腺が衰へ、生殖作用が止んで仕舞ふと云ふ風に考へて居る者がありますが、有名なブラウン、セカール氏の如きは、年を取る原因は生殖腺が衰へるからである、年を取る爲に衰へるのではなくて、生殖腺の衰へる事が原因となつて年を取るのであることを述べて居る。さうして氏は七十二歳の老人でありながら、自身の說を確める爲に、犬の睪丸を取りましてエキスを造つて自分の體に注射した。所が

精神的にも肉體的にも若返り、食慾も進み目も能く見えるやうになつた、と云ふ報告をして居る。今日の研究では、勿論其報告全部が必ずしも本統ではなかつたのであるが、さう云ふ說が唱へられる位であるから、生殖腺は壽命の上にも非常な關係を有つて居るといふことを考へて居なければならぬ。隨て我々は、嚴肅に手淫と云ふものに考慮を費さなければならぬ。此意味に於て我々は十分盲目的の力强き欲求に打勝たねばなりません。

結局は各自の自覺

之を要するに、私共は現代生活の上に立つて生殖問題を觀察して見ますと、色々の方面に於て時々刻々危險が迫り來つて居ると云ふこと

を感ずるのであります、而して之を十分解決して、此危急存亡の秋に當つて能く此重大なる問題を理解し、是が解決を期すると云ふことは、青年子女の自覺に俟たなければならぬと思ふのであります。要するに生殖と云ふ此の大問題は、人々各自が生殖に對する生物學的意義を自覺して、此の自覺に依つて始めて圓滿なる解決を期することが出來るのであります。

終に臨みて私は、再びシルラーの句を追憶して、性慾の情火を尊重すると共に、よく之を番し、よく之を指導し、此の神秘なる自然の力の神秘なる働をして、路を誤らしめざらん樣切に青年子女の自覺を冀ふのであります。

青年男女と性的生活 終

大正九年五月七日印刷
大正九年五月十日發行

著者　永井潛

發行兼印刷人　福島四郎
東京市外淀橋町字角筈九三

印刷所　千代田印刷株式會社

發行所　婦女新聞社
東京市外淀橋町字角筈九三
電話番町一三〇六番
振替東京二八〇七番

（定價金三十五錢）

婦女新聞の趣旨を賛成して御購讀下され候方は葉書又は電話にて本社に御申込下され度又既に讀者たらるゝ方は何卒一名にても新しき讀者を御紹介下さるやうに願上候

婦女新聞

毎週日曜發行

（價定）

一週（一部）送料共　金拾錢
十週（十部）同　金壹圓
三十週（三十部）同　金貳圓八拾錢
五十週（五十部）同　金四圓八拾錢

右は、東京市内ならば毎月集金人を廻らせ、地方ならば前金御拂込を願ふ筈に候へども、御都合にて三十週分づゝ集金郵便にて取立つる事に致し候ても宜しく候

發行所　東京市外淀橋町角筈　婦女新聞社

電話番町一三〇六番　振替東京二八〇七番

終